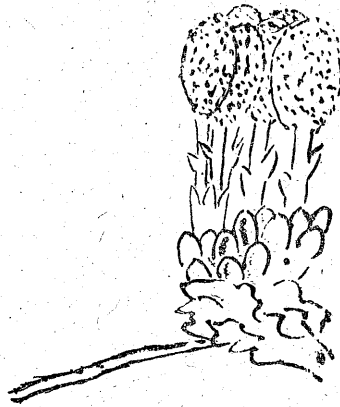
に於ける C. Wright 氏採集の標本の鑑定の結果が伊藤篤太郎博士により Journ. Linn. Soc. Bot. 24 巻(1887)に報告された時に初まる。所が德川時代にも既にその記錄のあつたことは，牧野先生も既に本誌5巻に紹介されてゐる如く，琉球のものに就ては質問本草外篇巻 1，第 12 枚目の「蛇菰」(天明元年，1781編)，及び越中立山のものに就ては本草通串證圖第 4 巻 7 及び 11 丁の「鎖陽」(嘉永 6 年 1853 出版)の圖入りの記述の二者が知られてゐる。そして今こゝに別の古記錄を紹介したい。それは平井宗源政恒氏の直筆になる寫本「花弁小錄後編」の「山土餅」に關する次の記事及び圖(縮少)である。

"土山餅　山寺坊主　土佐　初冬暖地の深山落葉の下に生ず。形略ぼ草蓯蓉に類し，而して其根は黃色，山藥の如く，採つて黐を製す。根上の鱗甲は莖と共に黑色にて，莖頭は毬を成し，黃粉を着くるが如し。"(假名交り文に直し，句點を附す。草蓯蓉はハマウツボの類，山藥はヤマノイモの類を指す。黃粉は葯又は花粉のこと。) この文章はよくツチトリモチ屬(恐らくは *Balanophora japonica* ツチトリモチ)の實體を說明して居る樣に思ふが，黑色とあるのは，送附された稍ゝ古い標本によつたものであらう。平井氏の寫本の「前編」には文化 4 年 5 月 5 日 (1807)附の序文があるから，それを去ることの遠くない時代に記述されたものであらうと推定する。これは內地に於ける最古の記錄であらう。土佐方言「山寺坊主」に就ては既に牧野先生も本誌 5 巻 272 頁に紹介されてゐて，土佐の一地方で小供達が根莖から「とりもち」を製することを述べてゐられるが，この記錄によつて，この名と用法も亦由來が古いものであることが判る。

○マレー半島の日本科學者達　(津山　尙)

戰時中南方に派遣された科學者の moral を歐米人は如何に見てゐるか，こゝにシンガポール植物園の E. J. H. Corner 氏が Nature 誌 158 號 (Jul. 1946) に書いてゐることをその一例として紹介したい。それは Symington 氏の大著 Foresters' Manual of *Dipterocarpus* の出版に關して郡場寬，德川義親，田根中館秀三，羽田彌太の諸氏が，その草稿の發見，安全のため自らの運搬，英人の協力による校正，出版費用の個人的負擔に到る迄戰時中のひどい困難と偏見と戰つて遂行した科學への奉仕を讚美したものである。この爲この著は無事に Malayan Forest Records 16 號として立派に出版され戰禍から助けられたと言ふのである。そして氏は次の樣に結論してゐる。

In the interest of science, one must distinguish carefully between the 'Japanese' of popular conception and the Japanese men of science, who in Malaya, at least,

endeavoured to serve science with impartiality.

これと同様なことが他の地域で他の科學者によつて行はれたことも段々世界に明かになつて來ることであらう。(Nature の記事は濱田稔博士の御好意により讀むことを得た)。

○ヤマアヂサヰの一品　(津山　尙)

牧野先生の日本植物圖鑑のヤマアヂサヰの項目中に「又稀に重瓣 (forma *plena* Makino) の者あり」とある。小生はこの傾向のものを 1935 年富士山麓西湖の北なる十二ヶ岳の中腹で採集した。このもの丶裝飾花の花瓣狀の蕚片は正常であるが，その上に密着して，長さがその半以下 2~4 mm 位の蕚片が 5~7 枚互に多少重なり合ひながら集つてゐるものであつた。

○ヤマノイモを掘る方法　(津山　尙)

福島縣二本松及小野新町方面の話。秋から冬にかけて附近に多いヤマノイモ(自然生)を堀つて生業としてゐる人が多いが，何しろ廣い山の中に散らばつてあるので落葉後は探し出す迄に苦心が多い。そこで誰が初めたともなく夏の中に生えてゐる所を見つけて置いてその根元に大麥の種を播いて置く方法が案出された。後になつて出揃つた麥の芽を目當に成熟した芋を堀るためである。同地では何故か5月の節句にはこれを食べると長虫 (蛔虫？) になると言つて避ける由である。尙トコロの鬚根の多い根莖を佛樣の草鞋に見立て丶お盆の供へものとする風習もあると言ふ。

○ゴヨウアケビの一新變種　(木村陽二郎)

牧野博士がゴヨウアケビ *Akebia pentaphylla* を 1902 年に始めて記載されたとき既に本種がアケビとミツバアケビとの雜種であろうと述べておられるようにゴヨウアケビの形態はいかにも兩種の組合せを思わすものがある。

アケビの葉が一般に小さく，小葉は五つで全緣なのに對しミツバアケビの葉は一般に大きく小葉は三個よりなり葉緣は波狀になつているがゴヨウアケビの葉は一般に大きく小葉は五個よりなり葉緣は波狀になつている。花をみてもアケビは花が大きく特に雌花は非常に大きくて雄花の總は短かく花の色は淡い。ミツバアケビは花が小さく雄花の總は長く花の色は濃いが，ゴヨウアケビは雄花はミツバアケビより大きいがアケビよりはずつと小さく，雄花の穗は長く花の色は濃い。

ゴヨウアケビはめずらしいものではなく處々に見出されるが私の知つているところでは大體の形質は殆ど一定している。アケビでも花の色に變化はあるがそう變つたものはない。ところが信州輕井澤千ヶ瀧で觀察したアケビの一種類は葉は殆どアケビに變りがないが花はミツバアケビに甚だ似ている。そして雌花の梗は短くて軸から殆ど直角に出ている。この春の私の觀察によれば雌花はアケビでは垂れるのにミツバアケビでは花梗が太く短く花軸から殆ど垂直にで丶いる。いろいろな書物の圖ではこれがはつきりかいてないし乾燥標本では判然としない。ところによつてこの關係が違うものがあつたとき